

会 頭 対 談

日 中 関 係 を 考 へ る



歴史の本質を語り合い 真の友好を創りあげよう

今号の会頭対談は、中国研究の第一人者で近現代の日中関係の軌跡を検証し続けてきた、国際教養大学学長の中嶋雄氏をゲストに迎え、日中関係の経緯と中国が置かれている現状、そして、日本JCが目指す真の日中友好のための方策について、池田佳隆会頭と語り合っていた。

反日教育は平和に逆行
今の中国は屈折している (池田)

池田 国土総面積が日本の約25倍の960万平方キロ、人口は統計上確認されているだけでも13億800万人、世界人口65億人の5人に1人は中国人という圧倒的なパワーを背景に、悲願の先進国入りを目指している中国。古くからわが国とは深いつながりを持ち、ともに歩んできたようにも思える中国ですが、最近、日本人には隣国である中国のことがよくわからなくなっているように思います。近現代の歴史認識の違いや靖国問題においてはその疑問が特に顕著となりました。

中国の反日プロパガンダがアジテートしている内容と、情報秘匿期限を過ぎ

て世に出てきた近現代史の検証・考証本から読み取れる内容には、かなりの食い違いがあります。どうして中国政府は日本人のことを鬼畜のごとく喧伝するのか。今年度の訪中ミッションで視察した、南京大屠殺記念館や盧溝橋の抗日記念館での反日プロパガンダは、日本人として正視に耐えない酷い展示内容でした。なぜに、1949年に建国したばかりの中華人民共和国と、今日の日本との関係が、政冷経熱などと揶揄されるごくしゃくする間柄になってしまっているのか。

今日は、このたび安倍首相直轄の教育再生会議のメンバーに就任された中嶋先生から詳しくお話を伺いたいと思います。

中嶋 ご存知のとおり、中国は第二次世界大戦が終わった時は、蒋介石率いる国民党が支配していました。ところが、終戦から4年後の1949年に毛沢東率いる共産党によって革命中国が創られたわけです。それから57年、結局いい围づくりができていません。政権中枢では、しよちゅう権力闘争が起きていますし、政策的なミスも多岐あります。大躍進政策もそうですし、文化大革命もそうです。最近では天安門事件もそうですし、あらゆるところで政策的な失敗、しかも歴史的な大失敗をやっています。

それに対して日本は、戦後61年、経済的には見事な成長を遂げて今日まで来ました。しかし、戦後の出発点は

国際教養大学学長

中嶋嶺雄

×

日本JC第55代会頭

池田佳隆



むしろ日本のほうが大変でした。大空襲による焼け野原、広島、長崎の原子爆弾による被爆。マイナスからの復興でした。でも中国には、日本人が戦時中に創った東北あるいは上海の浙江財閥等の資産がそのまま全部残ったので、戦後間もなくの中国の1人当たりGDPは日本とほとんど同じか、むしろ高かったんです。

また人口政策も、一人っ子政策をとれば人口が減っていくと考えたんでしようが、日中平和友好条約締結(1978年)の頃は、中国の人口はまだ9

億人だった。それがもう13億人を超えているわけで、すべての点で国づくりに失敗している。

そういう日本と中国のものすごい力の違い、日本社会の成熟というものを率直に認めれば、なにも過去の戦争とか、それも事実とはずいぶん違うことを大げさに言って反日教育をしなくても、もつと素直に日中関係というのを形成できるはずが、それができない。つまり、今の中国は、ある種のルサンチマンというか、嫉妬や憎悪というか、そういうところで非常に扇折して日本を見ている。それが戦後の日中間がぎくしゃくしている根本原因に繋がっています。

また、中国を見る日本人の視点にも、かなり問題がある。文革中も、毛沢東思想を大いにたたえて、いかにも中国が理想の国であるかのように、日本のマスメディアは書きまくっていましたからね。池田 文革中、大新聞がこぞって中国を褒めちぎりました。戦後の日本人には、こういったマスメディアからの左翼的偏向思想の刷り込みがかなり浸透しているように思います。

中嶋 そのとおりですね。中国に関する限り、今でも報道規制があつて、真実を書けば支扇を閉鎖されるわけですが、中国ネタは売れるネタなので、日本のマスコミは中国のメディア規制に基本的には抵抗せずに便乗しているんですよ。ほくは(産経新聞社の「正論」のメンバーです)、正論大賞もいただいたけれども、

産経新聞でさえ、ニューヨークタイムズやワシントンポストに比べたら、ずいぶんと中国に遠慮しているところがあります。

そういう中国共産党体制の上につくられている日本人マスメディアによる中国報道のために、やっぱりレンズが曇っちゃうんですね。今の経済成長だって、「中国は本当にすごい」というような報道ばかり。本当にすごかったら、中国はもつと立派な国家になつてますよ(笑)。マスコミが中国の実像と乖離したところ、ある種の幻想の中で中国を語るから、国民は戸惑うし、問題が不透明になるんです。

反日プロパガンダといえば、私が学生のころ「日中戦争の犠牲者は500万」と中国政府は言っていました。それがいつの間にか1000万になり、2000万になり、今ではなんと3500万人に膨れ上がっています。南京大虐殺記念館の入り口に「ビクティムズ30万」と書いてあったでしょう。「南京虐殺」の犠牲者はいくつこの間まで28万でした。反日政策強硬派の江沢民が2万人増やしたんですよ。

池田 この虐殺記念館に子どもたちを連れてきて、日本人に対する憎悪を植えつける反日洗脳教育を中国政府は行っているのですが、すぐにもやめてほしいと願っています。子どもたちには、愛や希望を教えるべきで、怨念や憎悪を教えるはいけません。これはある種の児童虐待です。世界平和と逆行します。



日本人はまず常識の レンズで生の中国を 見てほしい

中嶋嶺雄

(なかしま みねお)

国際教養大学理事長・学長

1936年長野県松本市生まれ。

60年東京外国語大学中国科卒業、東京大学大学院国際関係論博士課程中退。

東京大学・社会学博士。専攻は国際関係論・現代中国学・アジア地域研究。

東京外国語大学教授・学長を歴任。現在、国際教養大学理事長・学長。

安倍内閣の諮問機関である教育再生会議委員なども兼務。

著書に『現代中国論』『北京烈烈』(サントリー学芸賞)『国際関係論』など。



中嶋 江沢民が軍のサポートを得ようとして、南京虐殺記念館を大増改築して、あの「30万」という数字を作り出した。これに対しては、南京大学の知識人をはじめ、地元の人でさえも「ちょっとこれは無理がある。数字も急に30万人に増えているわけで、これでは虐殺そのものにもかなり疑問がある」と言っていました。

だから、日本人はまずは常識のレンズで中国の実像をご覧になるといい。そうすれば、いろいろな真実が見えてきますよ。

池田 場当たり的な政策で綱渡りをしてきた中国共産党一党独裁政権が、50年以上も君臨してきた事実には、あらためて驚きを覚えます。

戦後間もなく、米ソの思惑で中国が国連常任理事国になったことが、中国共産党が今日在る一つの要因かなとも考えたりするのですが…。

中国と国連との関係についてご説明願えますか。

中嶋 戦後間もなく成立した国際連合は、戦勝5大国が常任理事国になり、当時は中華人民共和国ではなく中華民国がその常任理事国となりました。今の台湾です。しかし、最初の国連総会には、伍條権という中国共産党の代表もオブザーバーで出席していました。革命によって中華人民共和国となり、国連には1971年のアルバニア決議案で中華民国と入れ替わったわけですが、彼

らには国連を活用しよう、利用しようという強い願望があった。国連をいかに活用するかということに関して、分担金もわずかしか支払っていない中国がものすごく戦略・戦術を練っていることを日本は知っておく必要がありますね。

六者協議で、日本は中国に頼れば北朝鮮を抑えてもらえるというのが従来の外務省の立場でしたけれども、それは根本的に間違っています。中国と北朝鮮は最後は地下水脈で結ばれていますからね。

中国は何とか北朝鮮をかばいたいんです。つい先日国連決議1718でもそういう態度が見えましたね。北朝鮮の崩壊は中国にとつて大問題なんです。アジアにおいて、中国は共産党の独裁体制。その前に立ちほだかる北朝鮮がいてくれることが、どれほど中国にとつて都合のいいことか。

大きな歴史の流れを見ますと、もうすでに中国の体制は崩壊の危機に直面しています。それがまさに天安門事件でした。あのときは軍も政府も、趙紫陽側と鄧小平・李鵬側に、真つ二つに分かれました。ゴルバチョフがベレストロイカの旗手で訪中した際に、彼が天安門広場に下りていけないほど、中国の民主化を大歓迎する学生たちが蜂起していたんです。あのときにもし趙紫陽が本気になるって李鵬と鄧小平を捕まえてしまつていたら、中国はソ連や東欧に先駆けて共産主義体制を崩し、民主化してい

たと思います。それほど、現実の中国社会は共産党体制に合っていないんです。だからこそ、それを維持するために、ものすごく軍事力を強化しているんです。

軍事力の強化の理由は2つあって、1つは、言うまでもなく台湾海峡です。2008年夏には台湾総統選挙があり、2008年春には台湾総統選挙があります。台湾情勢が果たしてどうなるか。台湾の人たちは中国と全く違つて民主化していますし、政治的にも、ある意味では成熟しています。「もし第3次国

共合作にでもなつたら、今の中国の勢いで飲み込まれてしまふかもしれない。独立しよう」という気持ちを台湾の人たちがもつと強めれば、国号を「台湾」という名前にしようとか憲法を改正しようという動きが必ず出てきます。総統選挙で台湾独立派が勝ち、本当に独立に向かったら、中国は昨年制定した「反国家分裂法」によって軍事力で制圧しようとするでしょう。ミサイルは800機ぐらい台湾に向けて並んでいるわけですからね。

そして、軍事力強化のもう一つは国内向けです。国民に銃を向けているんです。まさに徹底的な共産党体制維持のために軍が大きな力を占めているんです。問題は、こんな状態をいつまで続けられるのかということです。中国は今、国家的な大規模事業を次々に掲げ、これまででは反日感情で国民の目をそらし、国粋主義を煽つて、国威を発揚す



中国との真の友好を あきらめずに 挑戦していきたい

池田 佳隆

(いけた よしたか)

日本JC第55代会頭

1966年愛知県生まれ。
慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程修了。
93年(社)名古屋青年会議所に入会。
2000年名古屋JC理事、03年日本JC東海地区協議会監事、
04年名古屋JC理事長、05年日本JC副会頭、06年日本JC会頭。
三興コロイド化学(株)代表取締役。



るしか選択肢がないんです。2008年に北京オリンピック、2009年には三峡ダムが完成することになっていますが、これがうまくいくかどうか…。それが仮にうまくいけば、次の上海万博が2010年。このへんまでは何とかいくのかも知れない。だけど、ポスト2010年ぐらいから、中国は大変なことになりはしないかと危惧しているんです。いよいよ体制的な崩壊につながるのではないかとね…。

中国の環境問題も危惧すべき (池田)
原因は人権の抑圧にある (中嶋)

池田 なるほど…。ここ4、5年がとも重要な年ですね。

さて、ここで環境問題に話題を変えたいのですが…。

北京の上空が驚くほど黄土色だったんです。日本JC訪中ミッション渡航中の飛行機から見えたのですが、今年はずより酷かった印象です。雷雲かなと思うくらい黒ずんだ黄土色というか。全青聯の方に「黄砂ですか」と聞きましたら、「いや、光化学スモッグです」と言われて、眼や喉が痛いのは砂じやなくて光化学スモッグのせいだったのかと、非常にショックを受けたんですけども、北京でももうこれが日常茶飯事になっていると話してくれました。

胡錦濤政権は、第11次5カ年計画を立てて、「環境破壊を改善しよう」というスローガンを掲げていますが、実効性

はいかがでしょうか。大気や海には壁を造ることができないわけですから、隣国日本にとっても他人事ではないと非常に危惧しているところです。

中嶋 最近の中国政府は、さすがにあまりにも環境破壊が酷いので、それを改善するために本気で努力をしています。しかしながら、環境問題を解決しようとするのであれば、まずは人権のことを考えなければいけません。

中国は人権を徹底的に抑圧しています。特に少数民族なんかそうですし、過去に民主化運動をやった人たちもそうです。人権を徹底的に抑える国家では、環境に対する本格的取り組みはできないと思います。実は、環境改善は民主主義が貫徹されてなければできないんです。人権を抑圧し、軍事力で抑えておきながら、環境改善と言ったって、これははつきり言って無理です。政府がそういうことを言っても、実際の中国社会は極度の拝金主義社会になっていて、とにかくおカネ、おカネですから、少しでも儲かるのであれば、環境よりもみんなそっちに走ってしまおう。

その結果が、今の中国のものすごく酷い環境破壊なんです。北京もスモッグにおおわれていますけれども、ときどき晴れることがあるんです(笑)。聞いてみると、その日は人工雨を降らして、そのときだけ晴れる。中国政府も一生懸命やっていますね。

中国にとってこれから一番困るのは

水でしょうね。エネルギーも不足していますが、それ以上の問題は水だと思います。河川も汚染がすごいです。日本のかつての公害の比ではない。上海近郊の川は、悪臭と化学物質がいっぱい溶け込んでいる、井戸水も掘っても真っ黒という状況があちこちにありまして、当面これをどうするかという問題は深刻だと思っています。

今の地球温暖化のほとんどの原因は中国だと思えますし、大クラゲや赤潮が最近日本近海で大発生しているのも、中国が原因だろうと考えられます。「和諧社会」、これは調和社会という意味ですけど、調和社会が来るためには、人権が守られたり、民主化が行われたり、政治改革が行われたりしなければならぬのだけれども、そこは全く独裁体制でやっておきながら、「和諧社会」と言ったって無理なんです。

池田 そういう隣国中国をしっかりと分析もせずに、ただ人件費が安い、そして広大な市場を有しているからという理由で、ビジネスパートナーという感覚だけで中国をとらえている日本の経営人が非常に多いですよ。

JC運動の真価が問われる (池田)
新しい感覚も芽生えている (中嶋)

中嶋 中国では、さきほどの反日教育、これは本当に徹底しています。たとえば中国の世界史の教科書には日露戦争なんか出てきません。その前の日清

戦争から全部、日帝による侵略戦争と

教えているわけです。歴史教育は完全に共産党のイデオロギーによって規制されていますから、非常にこわいんですよね。例の反日デモが起こったのもまさにそう、あれは日本の国連安保常任理事国入りを阻止したから行わせたんです。そういう国を相手にしてビジネスパートナーを組むというても、かなり難しいということをまず考えておかなければいけない。しかし、その上で何とかパートナーを組むには、よほど日本の側にストラテジックな配慮が必要だと思えますよ。トヨタなんかも一生懸命出ていっているけど…。

私は自動車問題の専門家ではないけれども、やっぱり中国は最終的には国産車を造りたいと考えているんです。だからこそ大都市には絶対トヨタの工場を造らせないで、不便なところわざと部品工場を造らせている。

「日中友好」というスローガンだけで中国にのめり込んでいくと、宝山製鉄のように後になって大変なことになると思います。中国人は本当にしたたかなんです。そのしたたかさというものをわれわれはよく認識しておかないといけません。中国は大陸国家です、権謀術数渦巻く状況の中で王朝の興亡を繰り返してきたわけですから、考えることがある意味ではスケールが大きい。しかし最終的には、自分たちが世界の中心になるといって、中華思想に

基づいて行動していますよ。

最近気付いたことなんですが、情報統制されている中国にも世論が生まれつつあるんですよ。タクシーに乗ったとき「とにかく小泉はけしからん。東條はけしからん。悪人だ」と運転手が言う。だけど、降りるときに、「靖国神社ってどういところか知っているのか」と聞くと、「全く知らない」と言う。そういうふうには刷り込まれていて、まさに徹底的に洗脳されている。恐ろしいですね。ところが、別の運転手は「北京にはビルがすごく建っていて発展しているね。でも、このビル、空き室ばかりでがらがらだね」と言ったら、彼はまさにほくと同じ意見を持っていたんです。そして彼は「今の中国の開発に一番足りないのは日本精神だ」「靖国を参拝し続けた小泉首相は偉い」と言うわけですよ(笑)。

池田 タクシーの運転手が、見も知らない人にそんなことを言うようになってきたというには、中国の将来に大いなる期待を寄せたいですね。しかも日本精神と言ったとは…。

中嶋 そうそう。そういうことを考えますとね、中国の中にも大きな可能性がありますよ。そういう新しい感覚、考えを持った中国人とできるだけお付き合いできるような術を、青年交流という点でJICが推進されるのが日中の未来にとつて一番いいんじゃないでしょうか。

池田 日本JICの訪中ミッションで交流

する全青聯の若い有能な方々は、世界平和創造に向けた志という意味では、ほくらJICの感覚に近い考え方を示しています。子どもたちに言われなき怨みを植えつける反日教育が世界平和と逆行することも理解してくれていると信じています。しかしながら、共産党体制の中にあつて、表には出せないジレンマがあるんだろうなと思います。

中嶋 まさにそうなんですよ。そこをうまく交流することが、むしろJICにしかできない日中交流の大きなターゲットになると思います。安倍首相の訪中も成功したばかりです。

池田 私もそう考えています。日本JICも訪中ミッションを21年間続けてきました。開拓精神をもって井戸を掘りに行かれた先輩たちの勇氣ある行動には心から敬意を表するのですが、今は、その井戸水を使つていかに日中の真の友好を創り上げるのか、世界平和に繋げていけるのか、JIC運動の真価が問われているのだと思います。

腫れ物に触るような交流は、逆に中国の人たちを信用していかないことの現れです。そんな交流をJICが続けることに意味はないでしょう。友好を唱えるだけの実効性のない交流からは、真の友情は生まれませんし、本質について語り合えない者同士がいくら交流しても、本当の意味で日中の将来を明るくすることには繋がらないと考えているからです。

私はJICメンバーとして、中国との真

の友好を最後まで諦めずに挑戦していきたいと考えていますし、それができるのがJICだと信じています。JICが諦めたらおしまいだと思います。JICは決して諦めません。

ぜひとも先生には、次年度以降のさらにも実効性のある日本JICの運動の成果を楽しみにしていただきたいと思えます。

中嶋 そういふ志、行動力が本当の意味での友好、平和の礎になるんです。政治家や金儲けだけを考えている企業家にはできないことをJICには期待していますので、ぜひとも頑張ってください。

池田 日本・中国の子どもたちの明るい未来のために全力で頑張ります。今日は本当にありがとうございました。



Photo by NORIKO IIDA

“精神ルネッサンス”真の自立国家「美しき日本」の創造に向かって!!

We Believe

会頭対談

日中関係を考える

国際教養大学学長

中嶋嶺雄 × 池田佳隆

日本JC第55代会頭

NOVEMBER
2006

11